

Title	崩れ落ちる要塞：『羊飼の暦』試論
Author(s)	溝手, 真理
Citation	Osaka Literary Review. 28 P.94-P.106
Issue Date	1989-12-20
Text Version	publisher
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/25555">https://doi.org/10.18910/25555</a>
DOI	10.18910/25555
rights	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

# 崩れ落ちる要塞

——『羊飼の暦』試論——

溝 手 真 理

## I

Elizabeth 朝のイングランドで用いられていた暦は Julian calendar であった。1577年、法王 Gregory がキリスト教国に対して提示した改暦案（所謂 Gregorian calendar）は、ローマ法皇庁のイングランドに対する支配権の行使だとしてイングランド国民の反感をかった。一方、1580年前後に Elizabeth 女王お抱えの占星術師 Dr. John Dee により、Gregory の改暦に対抗する形で別の新たな改暦案が進められていた。従って1579年に暦の形式を用いた『羊飼の暦』が世に出たということは非常に時宜を得ていたと言えるであろう。<sup>1)</sup>

暦の起源は遠くバビロニアに溯る。人々は周期的な月の変化を尺度にして時を測った。月は29.5日を周期として変化するので、1ヶ月は29日ないしは30日とされた。そして、その繰返しを四季の周期的変化に合わせて1年を12ヶ月と定めたのはローマ皇帝 Numa Pompilius である。これを改暦したのが、Julius Caesar であり、これが Julian calendar の原形である。Harvey へ宛てた手紙の中で E. K. は、“[the author] compiled these xii. Æglogues, which for that they be proportioned to the state of the xii. monethes, he termth the SHEPHEARDS CALENDAR”<sup>2)</sup> と作品の題名の由来を説明している。12ヶ月の変化に合わせて作られた『羊飼の暦』は羊飼達の ‘Julian calendar’ なのである。

各月の牧歌の初めには木版画が付けられており、そこにはそれぞれの月に対応する黄道十二宮のサインがあしらわれている。これらのサインは月毎の太陽の位置を提示している。何故なら、太陽は黄道十二宮もしくは獣

帯と呼ばれるこの天界の帯を1年かけて一周するからである。月は1ヶ月で獣帯を一周する。他の惑星達もそれぞれの周期で、この帯を巡っている。そして、これらの星々の整然とした配置と秩序正しい運行が Ptolemy の宇宙体系を支える中心概念であった。

この概念と暦を組み合わせて特定時の天空における惑星の配置を図に表したものをホロスコープと呼ぶ。過去の英雄達の誕生時のホロスコープや歴史上の大事件の発生時におけるホロスコープを作成して、彼らの人生や事件の内容との照合性を統計的に割り出し、地上に対する天界の影響力を証明してみせたのは占星術であった。占星術は地上に働く宇宙の意志を読みとる有効な手段として、当時世界にその権威を誇っていた。特に Elizabeth 女王の宮廷は占星術を擁護していた。宮廷お抱えの占星術師 Dr. John Dee は女王の寵愛を受けて活躍していた。イングランドがスペインの無敵艦隊との会戦を当初ためらっていたのは、太陽が女王のホロスコープ上の月に対して好ましくない位置にあって、戦うには良い時ではなかったことにもよったというエピソードは、女王が政策上も占星術を重視していたことを物語っている。

しかし、彼女がこれ程占星術に執着したのは、占星術の持つ象徴力によるところが大きい。それは彼女の王国理念を補強するのに有効であった。理想的な統治の形体は、王が国家という小宇宙の 'primum mobile' として君臨し、その絶対支配のもとで国家が秩序と調和を保っている状態のことであるということを星界のしくみは表象していた。<sup>3)</sup>「第十天を司る王」のイメージは Elizabeth 女王が自らの王権を固守する為の重要な要塞であった。

法皇による改暦は Elizabeth の国家にとって、まさしく青天の霹靂であった。改暦の原因となった暦の狂いは天界の秩序の崩壊を意味し、暦の絶対性とそれに依って立つ占星術の権威を失墜させるに足る事実であった。そして、それは星の象徴力によって守られていた Elizabeth の王権を謂わないものとして排除する力を持っていた。1577年には宇宙の無秩序を示す

もうひとつの事件が発生していた。天界に彗星が出現したのである。特にこの時期の彗星は宇宙界への外界からの侵入者として、宇宙のPtolemy的秩序を揺るがす存在であると受けとめられた。

『羊飼の暦』が出版された1579年、イングランドは女王の結婚問題で大きく動揺していた。女王とフランス皇太子との結婚に反対する人々にとって、この結婚は、大陸勢力によるイングランド支配を意味するものであった。彼らにとって皇太子は外界からの侵入者に他ならず、彼を受け入れるということは Elizabeth の小宇宙の秩序に反したことであり、女王の主権の失墜を意味していた。

本論では「四月」、「十月」、「十二月」の分析を中心に Elizabeth 女王の王権を固守する力と、それを脅かそうとする力が、どのように現れているのかを暦と占星術の両観点から検討する。

## II

「十月」は詩と詩人を主題として歌われている。羊飼の若者達を楽しませるような歌を作ったところで何の見返りもないと嘆く Cuddie に Piers は、*“sing of bloody Mars, of wars, of giusts”* (l. 39) と推める。それに答えて Cuddie はローマの Tityrus のことを持ち出す。

Indeede the Romish *Tityrus*, I heare,  
 Through his *Mecenas* left his Oaten reede,  
 Whereon he earst had taught his flocks to feede,  
 And laboured lands to yield the timely eare,  
 And eft did sing of warres and deadly dreade,  
 So as the Heavens did quake his verse to here. (ll. 55-60)

“Romish *Tityrus*” とはローマの大詩人 Virgil のことである。Cuddie はここで Virgil の業績について言及している。Virgil は、牧歌、農耕詩、そして、叙事詩の大作 *Aenid* を創作した。Virgil が “bloody Mars” を歌ったのは、当然 *Aenid* でのことである。彼はこの作品により当時のローマ

帝国と皇帝 Augustus を称賛した。しかし、同時に彼は Augustus が支配するローマ帝国の守護神にも讃歌を献げていることになる。何故なら、ローマの守護神は軍神 Mars だからである。Spenser が牧歌を作ったのは Virgil を初めとして大陸の多くの有名な詩人達にならったのである。Spenser がイングランドの Virgil になる為には、イングランドとその女王 Elizabeth I, さらにはイングランドの守護神に献げる讃歌を創作する必要があることを「十月」は暗示している。そして、その為の序曲とも言えるのが「四月」である。

全篇の要旨を述べるにあたって E. K. は Romulus や Numa Pompilius, Caesar という歴代のローマの統治者達が作った暦について詳述している。月名への言及も見られ、Numa がローマの門番の双面神 Janus から定めた Januaris は、Janus が “god for that the old Paynims attributed the byrth and beginning of all creatures new coming into the world” なので “the gate and entraunce of the yere” にふさわしいと考えられて年初におかれたと解説されている。一月から六月迄の月名は全てギリシア・ローマ神話の世界の神々の名に由来している。それは Janus がそうであるように、神々がそれぞれの時間と空間を支配するという信仰があった為である。Caesar はこれらの神々と肩を並べて、自分の誕生月を記念して七月に自分の名を付けた。Caesar にならい Augustus は、さる戦勝を記念して八月を自分の月とした。そして、これを見た後のローマ皇帝達は己れの名声や功績を後世に残す手段として改暦・改月名をこぞって行ったという。<sup>4)</sup>確かに、Julian calendar と共に、又、‘July’, ‘August’ と共に Caesar や Augustus の名は時の続く限り生き続けることになるであろう。

Spenser は “Epilogue” で以下のように記した。

Loe I have made a Calender for every yeare,  
That steele in strength, and time in durance shall outweare :  
And if I marked well the starres revolution,  
It shall continewe till the worlds dissolution.

『羊飼の暦』も王達の名声と功績とを残す手段であるのなら「四月」は、'Elizabeth' と名付けられる月にふさわしい。「四月」の“Argument”には、“this Æglogue is purposely intended to the honor and prayse of our most gracious sovereigne, Queene Elizabeth”と書かれている。「四月」は女王讃歌なのである。

女王はさまざまな象徴で称えられている。彼女はElisa という名の“Queene of shepheardes all” (l. 34) として登場する。深紅の衣装とアーミンの毛皮という“royal array”に身を包み、頭には美しい花々で飾られた冠を戴いている。

Yclad in Scarlot like a mayden Queene,  
 And Ermines white.  
 Upon her head a Cremosin coronet,  
 With Damaske roses and Daffadillies set :  
 Bayleaves betweene,  
 And Primroses greene  
 Embellish the sweete Violet.

(ll. 57-63)

顔の美しさは Phoebe に例えられるが、その頬は Tudor の血を象徴している——“the Redde rose medled with the White yfere, In either cheeke depeincten lively chere.” (ll. 69-70) 彼女の姿を天上から垣間見た Phoebus は地上にもうひとつの太陽を認めて顔を赤らめる——“he [Phoebus] blusht to see another Sunne belowe” (l. 77)。太陽は王の象徴であり、讃歌の前半は地上の女王 Elizabeth の至高の美と女王にふさわしい品性を称賛している。

後半は神話的背景を持つ幻想的な風景の中で Muses, graces, Chloris をチーフとするニンフ達を認めて Colin が歌う Elisa 讃歌である。graces に向かって Colin が呼びかける。

Wants not a fourth grace, to make the daunce even?  
 Let that rowme to my Lady be yeven :

She shalbe a grace,  
To fyll the fourth place,  
 And reigne with the rest in heaven. (ll. 113-7) (下線筆者)

第四の場所については『妖精の女王』第六卷第十篇に比較すべき箇所がある。礼節の騎士 Calidor は Acidale の丘で Venus の侍女達の輪舞に遭遇する。その輪の中央に位置する乙女は “fourth Mayd” と呼ばれており, “she worthy was, / to be the fourth with those three other placed” (VI, X, 25)<sup>5)</sup> である。さらに,

So farre as doth the daughter of the day,  
 All other lesser lights in light excell,  
 So farre doth she in beautyfull array,  
 About all other lasses beare the bell,  
 Ne lesse in Vertue that beseemes her well,  
 Doth she exceede the rest of all her race,  
 For which the Graces that here wont to dwell,  
 Haue for more honor brought her to this place,  
 And graced her so much to be another Grace. (VI, x. 26)

衣装においても徳においても他の者に勝り, “the daughter of the day” すなわち, Venus に例えられる彼女は Graces 達によって, この場所を与えられている。この乙女は Venus の美と徳の全てを具現する Venus の侍女なのである。

「四月」の Elisa と『妖精の女王』の “fourth Mayd” とは類似したイメージとしてとらえることができる。“fourth Mayd” は “jolly shepherds [Colin’s] lasse” (16) だったが Elisa はどうであろうか。このことに関しては興味深い見解があるので次に掲げたい。

The suddenly down-home diction or “Albee forswonck and forswatt” (99) — where “Albee” may pun on Albion, i.e. England — presents Colin as Eliza’s rustic English lover and so affirms the concept of

the mystical marriage of Virgin Queen and England that Elizabeth herself had initiated.<sup>6)</sup> (下線筆者)

“a fourth grace” である Elisa は第四の場所を満たして天を治めることになるであろう Venus の待女のひとりであり、羊飼 Colin の恋人なのだ。そして今、Colin は Elisa への讃歌を高らかに歌う。

Pype jolly shepherd, pype thou now apace  
 Vnto thy loue, that made thee low to lout :  
 Thy loue is present there with thee in place,  
 Thy loue is there aduaunst to be another Grace. (VI, x, 16)

Elizabeth 女王讃歌が全体の第四番目に位置していることは Virgil の第四牧歌にも照応している。俗に ‘Messianic’ と呼ばれるこの牧歌で Virgil は理想国家の到来を歓迎し称賛している。Spenser の「四月」も第四牧歌であり、Elizabeth 女王の統治を賛美している。第四の場所はまさしく Elisa のものなのである。しかし、暦の上で第四の場所は Venus のものである。‘April’ は Aphrodite = Venus に由来する名であり、この月は Venus に献げられた月なのである。四月の太陽は金牛宮に位置している。そして、金牛宮の支配星は Venus である。「四月」において Elizabeth 女王は太陽に例えられた。すなわち女王は Venus の支配宮に位置する太陽である。女王が「四月」において Venus の待女 “grace” であり、又 Venus の宮に位置する太陽であるということは、彼女の王国の守護神は Venus であり、彼女は Venus の支配と庇護のもとにいる女王なのである。

王を国家という小宇宙の ‘primum mobile’ に例えることで、星の象徴力を利用して王国理念を補強することが可能になることは既に述べた。Elizabeth 女王が「四月」の中で ‘primum mobile’ として表される為には Venus がアレゴリーとしての女王自身でなければならない。「四月」の “Embleme” は *Aenid* からの引用である。“*O quam te memorem virgo ?*” という Thenots の “Embleme” は、Venus が Diana の待女のひとりに変装して息子 Aeneas の前に現れる場面における Aeneas のセリフである。



E. K. の註によれば、この“Embleme”は Venus の気高い姿を Elisa になぞらえることによって、美しさと気品において Elisa が Venus に決して劣ってはいないことを意味するという。すなわち、Elizabeth 女王は“Embleme”において待女の姿をした Venus に例えられている。待女のひとりである Venus とは他ならぬ Elisa のことであり、「四月」において極度に象徴的にはあるが Venus は Elizabeth 女王のアレゴリーとして現れるのである。

「四月」は女王賛美と共に、その讃歌を歌った Colin の腕前を称賛する牧歌である。羊飼いの Colin はアレゴリーとしては女王の夫としてのイングランドである。故に「四月」は、イングランドとその女王 Elizabeth I, そして、その守護神 Venus を称賛した歌であり、イングランドの *Aemid* への序曲である。そして、Venus を女王自身のアレゴリーとすることで、王国の支配権が絶対君主のものである限り、理想的統治の状態が維持可能であることを示そうとしている。「四月」は明らかに、女王の絶対王政を支持する歌なのである。

### III

暦の最後を飾り、占星術的総決算となる「十二月」は Colin の嘆きの歌である。彼は恋が与えた傷の痛みを耐えかねて自嘲気味に次のように嘆く。

But ah unwise and witlesse *Colin cloute*,  
 That kydst the hidden kinds of many a wede:  
 Yet kydst not ene to cure thy sore hart roote,  
 Whose ranckling wound as yet does rifelye bleede.  
 Why livest thou stil, and yet hast thy deathes wound?  
 Why dyest thou stil, and yet alive art founde?

Thus is my sommer worne away and wasted. (ll. 91-7)

Colin は自分の人生を四季に例え、恋に燃えた夏を後悔している。“thy sore hart root”や“ranckling wound”とは恋によって心に受けた致命傷

のことである。「八月」の歌合戦でも恋の矢によって受けた致命傷について歌われている。

The glaunce into my heart did glide,  
     hey ho the glyder,  
 Therewith my soule was sharply gryde,  
     such woundes soone wexen wider.  
 Hasting to raunch the arrow out,  
     hey ho Perigot,  
 I left the head in my hart roote:  
     it was a desperate shot.  
 There it ranckleth ay more and more,  
     hey ho the arrowe,  
 Ne can I find salve for my sore:  
     love is a curelesse sorrowe.  
 And though my bale with death I bought, (ll. 93-105)

Perigot の状況は Colin の状態を代弁しているようなものである。Colin は Rosalind を恋したことにより死という高価な代償を支配う結果になったのだから。

全てを代無しにした Colin の夏は彗星が引き起こしたものだだった。“His [Colin’s] manhoode to the sommer, which he sayth, was consumed with great heate and excessive drouth caused throughe a Comet or blasinge starre.” (“December”, “Argument”) 彗星はあらゆる時代に迷信として、奇妙な出来事や大災害の先触れだと考えられた。<sup>7)</sup>

Hugh De Lacy は “Astrology in the Poetry of Edmund Spenser” という論文において、彗星について以下のように解釈している。

Comets, . . . , are terrible beacons warning men from the destruction toward which their depravity rapidly drives them. The usual accompaniments of a comet, — famine, pestilence, war, — are the direct punishment of an angry God.<sup>8)</sup>

「十二月」の彗星が伴ったのは凶作だった。“My harvest wast, ny hope away dyd wipe” (l. 108) と嘆く Colin には神の罰が降っているのではろうか。確かに恋の不成功の為に羊飼の務め一羊の世話と歌作り一をおろそかにしている Colin は怠惰と言えるかもしれない。そして、怠惰は墮落的な状態である。しかし、これはこの作品の全体の趣旨に合わない。

文学の中で象徴的に用いられている彗星について Allen は “the appearance of a comet was feared especially as the precursor of the king’s death” と述べている。<sup>9)</sup> そして、演劇においては登場人物内の王族の死の場が展開する前に、彗星を舞台上に出現させることがひとつのコンヴェンションとなったことを指摘している。<sup>10)</sup> 又、実際に Queen Mary と Charles V の死は1558年の彗星によって引き起こされたという見解も当時存在した。<sup>11)</sup>

「十二月」の彗星は Colin の死の先触れなのだろうか。羊飼のような身分の低い者の死の先触れに彗星を使うのは一見コンヴェンションに反しているが、彼はアレゴリーとしてのイングランドであることを考慮する場合は認め得る。しかし、その死が彗星によって先に知らされるにふさわしい人物と言えは「十一月」でその死を悼まれている高貴な血の生れの乙女 Dido であろう。そして、一般に「十一月」を政治的アレゴリーの視点から分析すると、Dido は Elizabeth 女王なのである。「十二月」の彗星は Elizabeth 女王と彼女の王国イングランドの死の先触れであるかもしれない。そのことを証明する為に、天界における彗星の位置を検討してみたい。

彗星の位置を示す箇所を次に掲げる。

Tho gan my lovely Spring bid me farewell,  
 And Sommer season sped him to display  
 (For love then in the Lyons house did dwell)  
 The raging fyre, that kindled at his ray.  
 A comett stird up that unkindly heate,  
 That reigned (as men sayd) in *Venus* seate. (ll. 55-60)

*The Oxford English Dictionary*によれば、‘seat’には‘residence’の意味がある。Venusの‘residence’とは文脈から考えて、占星術的な意味における‘house of Venus’、すなわち Venusの宮金牛宮のことである。『羊飼の暦』の金牛宮は「四月」である。本来「四月」に位置していたのは太陽である Elizabeth 女王だった。彼女は守護神＝支配星の Venusの庇護と支配を受けている女王であった。彼女の王座は Venusから与えられたものであったのだ。‘seat’には‘the throne of a king’の意味もある。Venusの王座とはまさしく Elizabeth 女王に与えられた王座のことである。彗星は女王が座すべき王座についていることになる。

彗星は宇宙界の秩序を破って入り込んでくる外界からの侵入者である。この時期、イングランドという小宇宙からすれば外界にあたる大陸から、イングランドに侵入を謀ろうとしている人間がいた。それは‘dauphin’、すなわち、フランス皇太子 Alençon である。彼は Elizabeth 女王との結婚によってイングランドにその居を定めることになる人物であった。

Alençon は通例「十一月」の“*Fishes haske*”と関連させられる。

*Phoebus weary of his yerely taske,  
Ystabled hath his steedes in lowlye laye,  
And taken up his ynne in Fishes haske.* (ll. 13-5)

この魚は‘dolphin’から‘dauphin’を象徴し、双魚宮に位置する太陽は‘dauphin’と結婚する Elizabeth 女王を表しているとされてきた。<sup>12)</sup>

しかし「十二月」の彗星も実は‘dauphin’なのである。Elizabeth 女王の国家という小宇宙における絶対支配者としての主権を象徴する時、彼女は第十天‘primum mobile’として表される。そして、『羊飼の暦』の中の象徴体系において第十天は、イングランドの守護神であり、支配者である Venusのことであるから、すなわち Elizabeth 女王自身のことである。従って Venusの宮の彗星とは、Elizabeth 女王の宮であるイングランドに外界から侵入した彗星ということになる。その彗星の侵入を許すということは、絶対君主の主権の堅固さを表す要塞として、外界から自己の宇宙を守

っていた第十天の崩壊、すなわち女王の死を意味する、彗星 ‘dauphin’ は Elizabeth 女王の象徴的な死をもって王座につく。「十一月」の双魚宮に存在する太陽とは、Dido の死、つまり Elizabeth 女王の権威の失墜の後に支配者となる Alençon 自身のことなのかもしれない。

女王の結婚は、絶対君主の主権の失墜を意味し、星界においては第十天の消滅を示す。‘primum mobile’ の消滅は宇宙界の秩序と調和の崩壊をもたらす。そして、星の運行をもとに作られた暦は当然狂い出す。故に Colin の人生の暦は早過ぎる冬を迎えるのである。やがて、原動力を失った宇宙は、その運行を止めるであろう——Colin は死ぬ。

『羊飼の暦』を星の象徴を使って検討してきた。その上で“Epilogue”を今一度見直すと前半6行の持つ特殊な意味に気付く。羊の飼い方や守り方を教えるとは理想的な国家の統治のし方を示している。理想的な統治とは唯一絶対の王による統治のことであり、その強さは鋼鉄を上回り、その名声は普遍である。星の運行と同じく、それは世の終わりまで存続することであろう。世の終わりとは、絶対王政崩壊の時、すなわち絶対君主の死を意味している。

Loe I have made a Calender for every yeare,  
That steele in strength, and time in durance shall outweare :  
And if I marked well the starres revolution,  
It shall continewe till the worlds dissolution.  
To teach the ruder shepheard how to feede his sheepe,  
And from the falsers fraud his folded flocke to keepe.

「十二月」における彗星の侵入は、Elizabeth 女王による絶対治世の終わったことを表している。そして『羊飼の暦』に現れた彗星の果たす役割は、Elizabeth 女王の結婚という象徴としての女王の死の予告なのである。

## 注

- 1) *The Works of Edmund Spenser : A Variorum Edition*, II, p. 243.
- 2) 『羊飼の暦』からの引用はすべて *The Yale Edition of the Shorter Poems*

- of *Edmund Spenser*, ed. William A. Oram, Einar Bjorvand, Ronald Bond, Thomas H. Cain, Alexander Dunlop, and Richard Schell (New Haven: Yale University Press, 1989) に拠る。
- 3) Cf. Warren Kenton, *The Celestial Mirror* (London: Thames and Hudson, 1974), p. 83.
  - 4) Cf. 永田 久『暦と占いの科学』, 新潮選書 (1982), 第5章。
  - 5) 『妖精の女王』からの引用はすべて Edmund Spenser, *The Faerie Queene*, ed. A. C. Hamilton, Annotated English Poets Series (London and New York: Longman, 1977) に拠る。
  - 6) *The Yale Edition. op. cit.*, p. 69.
  - 7) *O. E. D.*, "Comet", sb. 1.
  - 8) Hugh De Lacy, "Astrology in the Poetry of Edmund Spenser," *Journal of English and Germanic Philology* XXXIII (1934), pp. 520-43.
  - 9) Don Cameron Allen, *The Star-Crossed Renaissance: The Quarrel about Astrology and Its Influence in England* (New York: The Duke University Press, 1941, reprint 1973), p. 181.
  - 10) *Ibid.*, p. 181.
  - 11) *Ibid.*, p. 74.
  - 12) Paul E. McLane, *Spenser's Shepherdes Calender: A Study in Elizabethan Allegory* (Notre Dame, Indiana: University of Notre Dame Press, 1961), pp. 53-4.